

第28期社会教育委員の会議

第3回定例会

議事録

平成30年10月10日

【１】 開催日時

平成３０年１０月１０日（水）１８時３０分～２０時２０分

【２】 開催場所

世田谷区役所第２庁舎３階 教育委員会室

【３】 出席委員

萩原委員（議長）、坂倉委員（副議長）、峯岸委員、神保委員
森岡委員、村上委員、権田委員、山崎委員、吉岡委員、湯澤委員

【４】 出席職員

教育委員会事務局
花房生涯学習部長、田村生涯学習・地域学校連携課長
大井社会教育係課長補佐、御園生社会教育担当係長、橋本社会教育係主任

【５】 傍聴人

無し

【６】 次第

１ 前回議事録の承認

２ 意見交換

（１）方策や施策化をめぐる意見交換（１）

①これまでの振り返り

②活動スケジュール（案）について

③今期テーマの方向性をめぐる意見交換（２）

－具体的設定に向けて－

（２）その他

○議長 ただいまから第28期社会教育委員の会議第3回定例会を開催いたします。

まずは会議資料1の前回議事録の承認についてです。事前に皆様にはお目通しいただいて確認等していただいているかと思いますが、改めて訂正、修正等ございますか。

(なし)

○議長 では、承認いただいたということで、この会議の終了後、森岡委員と、前回ご欠席だった峯岸委員にご署名お願いしたいと思います。

それでは、ここからは次第の意見交換のところに入っていきたいと思います。

本日の本題は、意見交換(1)方策や施策化をめぐる意見交換となっております。最初に前回までの振り返りをした後、今後の会議活動スケジュールについて、その後に今期テーマの方向性をめぐる意見交換(2)ということで、具体的な御議論をいただく流れで進めていきたいと考えていますが、それでよろしいでしょうか。

(異議なし)

○議長 では、ここまでの振り返りをしたいと思います。会議資料2をごらんください。前回、前々回、特に第1回目の会議では、今後のこの会議の今期のテーマの方向性についてということで、事務局からは第27期の、前期の子どもの貧困をめぐる議論されたことを足場にして、そこで提言された、どんな状況にあっても生きづらさを感じず前向きに生きていくための環境づくりに向けた具体的な施策づくりをということで、第1回目では事務局の提案がありまして、簡単に皆さんの最初の御意見、御感想を言っていた。前回は、このテーマの方向性についてまとまった時間をとらせていただいて、少し踏み込んで皆さんから御意見を伺った、お互いに意見交換をしたというところになります。

この会議資料2及び「関係性の貧困」における方策や施策化に向けた参考集とこの2つの資料を用意させていただいたのも、第27期の報告書だけではやはり子どもの貧困というのはなかなか理解しづらいことがあったわけです。2回のこの会議の中だけで子どもの貧困のこれまでの議論をカバーするというのは非常に難しい、時間的に厳しいものがございました。この報告書にまとめる間には、やはり2年間、各現場に携わっていらっしゃる前期の委員からさまざまな事例が語られてきていたのですが、やはりこの報告書にまとめる割愛せざるを得なくて、そのことを振り返って確認しているとそれだけで時間切れになってしまうので、そこを補う意味で、事務局のほうでは参考資料、そして私のほうで一応現代的貧困の共通理解に向けたメモというレジュメを用意させていただきました。

まず、会議資料2のレジュメに沿ってお話ししますと、そもそも貧困とは何だろうか。

やはり貧困というと経済的な貧困を私たちはイメージすることが多いですから、にわかに今の現代的な貧困を理解しにくいというお声もありました。これは社会福祉辞典をひもとくと、貧困という言葉そのものは生活する上であってはならない欠乏状態ということ。つまり、それは経済的な要因という場合もあるし、関係性という要因もあるでしょうし、さまざまある中で、生活する上であってはならない欠乏状態だと。ですので、この貧困という言葉は、体験の貧困とか、経験の貧困とか、そういう言葉でも使われたりするわけです。必ずしも経済的な貧困のみを指している言葉ではないということがわかります。

さまざま生活する上であってはならない欠乏状態ということを考えますといろいろ出てくるわけです。ただ、私たちは、古典的な経済的な貧困、かつて貧乏だった、みんな貧乏だったという戦後復興期の貧困をイメージするわけです。それは今からすると古典的な貧困と分類されている。戦後復興期の貧困の特徴は、経済的な貧困ですけれども、現在と何が違うかということ、多くの国民が同じような欠乏状態に陥っていた。だから、共同貧という言い方、これは民族学者の柳田國男が名づけた言葉ですけれども、皆が貧乏だったねという認識です。ある意味、そこでは共同性というのが前提にある。みんなで助け合って、その貧乏から抜け出していこう、豊かになっていこう、そういうモチベーションも働いていたわけです。経済的貧困、絶対的貧困でありながら、関係性においてはある種、現代とは違う、ある意味、共同性に満たされている部分もあったというのが見えてきます。

それに対して現代的な貧困というのは、バブル経済崩壊以降実現していると整理されています。経済的な貧困に加えて関係性の貧困がプラスされているということです。この相対的貧困については、貧困率の推移をごらんいただくと、1985年以降、全体としては右肩上がりです。2012年から2015年では少し下がったけれども、依然貧困率というのは高い。特に母子家庭の場合の相対的貧困率は50%を超えています。ですので、いわゆる典型的な男手が稼ぎの中心であるというような家族構成の場合、旦那さんが病気であるとか大きなけがであるとか、あるいは死亡であるとか、そういった形で収入源が絶たれた場合は一気に貧困に陥っていく、そのリスクを50%と見るができるわけです。そういう意味ではどの家庭においても、ちょっとしたきっかけで相対的貧困に陥るリスクというのは潜在的に抱えているというのがこの現代的な貧困の特徴とも言えるかもしれません。

そこに加えて、関係性の貧困というのが加わってきます。2に行きますが、(2)の関係性の貧困とは何かということですが、これは「財の貧困」以外の欠乏状態全て、だと専門家たちは言っています。

例えば体験機会、学習機会、遊ぶ機会、友達や家族などとのコミュニケーション機会の欠乏、また進路選択の自由や将来展望・希望の剥奪、その他生活上の選択可能性の制限や制約といったことが、関係性の貧困とそれによってもたらされる状態を示しています。当然経済的に欠乏状態に陥れば、それによってさまざまな機会が奪われていく、選択可能性も相当制限されるというのは、当然切っても切れない形で起こり得るというのは理解できるかと思います。

そのことでの子どもの自己形成への悪影響として、社会的な孤立、自尊感情や自己肯定感の低下、あるいは自信回復力、最近ではよく心理学で言われていますレジリエンスという自信回復力みたいなものの低下につながる。ちょっとした挫折でなかなか回復しないというような状態です。関係性が貧困によってもたらされる、そうした悪影響というのが懸念されるわけです。

前回、前々回でも関係性の貧困というのを社会的孤立に言いかえることもできるのではないかという御指摘もありましたが、社会的孤立というのは、関係性の貧困によって多様な機会の剥奪や自由の制限によってもたらされる1つの状態である。つまり、社会的孤立だけが貧困状態ではなくて、ほかにもいろんなことがこの関係性の貧困によってもたらされるというのが見えてくるわけです。

そして、現代的な貧困をめぐる大きく2つの見方としては、1つは個人主義的な貧困観、もう1つは社会構造的な貧困観と名づけられるような物の見方があるそうです。

まず、(1)個人主義的な貧困観というのは、そもそも個人の問題であり、特殊な問題であるという物の見方からくるものだ。やはり目に見えて困窮状態である事例というのはなかなか触れることがない。これは特殊であると。だから、特殊なケースである以上は、これは一部の人間を対象にしたものにすぎないであろうという物の見方になるわけです。

こうした立場に立ったときに、では、貧困の原因は何かというと、当事者ないし親の努力不足、自己責任という物の見方に根差していくという見方になる。

主な方策としては、多少の経済支援、ベーシックインカムという政策提言というのが一時もてはやされた時期がありました。これは割と新自由主義の考え方にに基づきながら、ここまでは最低限保障したのだから、あとは自助努力に向けた叱咤激励がその次に来るという2階建ての考え方になるわけです。

これはある意味、社会が求める能力を早いうちからとにかく身につけないとまた落ちこぼれるぞという、ある種の社会的な恫喝みたいなものも含まれる。

もう1つが社会構造的に貧困を見るという物の見方です。これは第27期のときに、試行錯誤の中で貧困とは何だろうかということを議論して、たどり着いていったところと多く重なっているのではないかと思います。貧困というのは社会構造の問題によってもたらされているという物の見方です。

これは主な要因としては非正規雇用率の拡大です。平成29年度では非正規雇用率は37.3%です。だから、もう3人に1人以上が今は非正規雇用という状況になるわけですね。今までだったら普通に就職できたであろう学生であっても非常に苦勞するというケースもあるわけですね。就勞できても不安定な雇用状態で生活せざるを得ないということです。

それは下の図1の正規・非正規雇用者数のグラフを見ていただければ、一目瞭然です。非正規雇用者数はどんどんふえている。つまり、バブルが崩壊した後、日本の雇用形態が大きく変わった。だから、個人がどんなに努力しても、こういうパイが決まってしまっている。これは個人の努力ではどうしようもない、そういう要因が働いている。

1つは住宅供給の制度的不備ということです。日本の場合は、非常に住宅供給のコスト、住宅を取得するときのコストが高コストになっている。住宅を取得して家庭を持つとなると、恐らく子育て世代の若い世代にとってはかなりの過重な状況にあるのではないかと思います。これは容易に想像できるわけです。

もう1つは、消費主義社会です。サービス社会に移行し、暮らしのあらゆる営みにお金がかかってしまう。

更に、個人情報への過剰な保護が今働いてきてしまっている。他者や関係機関・団体同士の密なつながりの機会が大幅にこれで縮小してしまう。学校も今、家庭訪問はしていない状況ですね。つまり、親が見えない、家庭が見えない、じかに家庭に入ってどういう状況かというのを確認もできないというような、そういう状況も生まれてくるわけです。子ども家庭支援センターなどもあったり、児童館があったりとかしますけれども、子どもにかかわる支援機関はありますが、個人情報の保護という観点から、共有して一緒になってサポートしていくのが難しいというのは、昨年この会議の中でも何度か繰り返して出てきておりました。

それともう1つ、地縁ネットワークの衰弱です。これが昨期の出した結論部分に大きく重なるんですが、身近な地域の共助の働きが不全化している。こういったことが社会的な要因として重層的に重なっているがために、経済格差が拡大するだけではなくて、階層が固定化してしまうということが起こっていると。そもそも現代の貧困というのは社会構造

的にもたらされてしまっているという認識のもとで、では、どういう対策が提言されているかという、まず当事者に対してのエンパワーメント、そして社会的な基盤をもっと整備するということ、あと就労支援とか学習支援、経済支援、社会参加や社会参画支援など、多角的包括的な支援を考えていく必要があるということが言われています。今現在のところを整理するとこのような議論がなされているというところですね。

それで、今日は報告書の結論部分を拡大コピーしてもらいました。先ほど説明した社会構造的な貧困観というところと、報告書でまとめた認識は重なっているのではないかと思います。前期で議論して貧困に陥りやすいハイリスクなファミリー層というのが見えてくる。より一層貧困状態になるリスクを抱えた家庭ほどさまざまな社会資源ともつながりを絶っているし、近隣の他者ともなかなかつながっていないという、そういう認識です。

そして、行政側がいろんな施策は打っていますが、当事者に届いていないし、当事者も見えていないという認識だった。また、さまざまな市民活動、支援活動もまた行政や当事者と十分なつながりが得られていない、そういう問題把握を前期したわけです。

公的な支援制度と当事者を結びつけていくためには、その間に何かがないといけない。何が必要かといったら、インフォーマルな「共の世界」ということです。

そのインフォーマルな「共の世界」というのは何によって構成されているかという、市民団体もそうですし、行政、民間事業者もさまざまな形で社会貢献的に支援活動をされています。子どもたちが日ごろ使っているLINE、あの会社もいじめの相談の事業を始めたということですし、こうした三者が連携をとりながら、当事者に近いところで、当事者にとっても身近に気軽に気兼ねなくつながれるような、そういう世界をつくっていく必要があるというビジョンを前期で描いたということです。

前回皆様からはこの方向性で承認をいただきましたので、ここからは、どんな状況にあっても前向きに生きていくための環境をどうつくるかという方向性で、その具体的な施策化に向けて御議論いただくことになろうかと思います。

次に、会議資料3の今期の活動スケジュールですが、今期、2年間で10回を予定しています。4回目と5回目が空欄になっています。10回目からさかのぼっていくと、活動報告書の取りまとめが再来年の2月、そしてそのための活動報告書の素案づくりからその検討をすることも考えると、7、8、9はもう何か新しいことはできない。そして6回目で活動報告書の素案をつくる土台になる、素材となる課題の抽出や整理、あと具体的な方策に

ついて、出ていないといけない。この子どもの貧困をめぐって、今後のインフォーマルな共を育んでいく環境づくりに向けた課題、方策は何かということを4回と5回で出していかなければいけないということになります。

そういう流れの中で、事務局からお話しをよろしくお願いします。

○事務局 今後4回目、5回目、どういう形で進んでいったらいいのかということで、改めて事務局も検討させていただきました。

前はテーマの方向性といたしまして、関係性の貧困からの脱却に向けた方向性と方策ということで合意がとれたと認識しております。したがって、今期はこの方向性と方策から具体的な施策に向けて議論していただきますが、この会議だけではなくて、現代的な貧困や関係性の貧困などをまずは地域で青少年にかかわる方々に知っていただくとともに、その上で、皆さんがどのような意見あるいは考えをお持ちになっているのか、また、どんな課題を抱えているのかということなど、現場の声を参考にすることが施策化に向けた今後の議論に大変重要になってくるのではないかと考えております。

そこで御提案ですが、第5回目に、地域で青少年にかかわる活動をしている方々を対象として、シンポジウム、ワークショップができないかということです。

会議資料3には4回目、5回目の開催予定日は12月、1月となっていますが、時期についても考えていただければと思っています。

チラシやホームページを使いながら、あるいは御自身の団体、御存じの関係団体、個人を含めて周知していただくような形で考えております。

○議長 広く区民の方々にこの子どもの貧困をめぐっての御意見を聞く。同時に、子どもの貧困をめぐる課題についても広く区民に周知をする。その2つの柱だと思いますが、それを第5回でシンポジウムやワークショップで行ってはどうかという御提案でした。その準備を4回目ということでよろしいですね。

では、ただいまの提案については、何か御意見等ありましたらお聞かせください。

○副議長 シンポジウムとかワークショップは、どれぐらいの会場で、何人ぐらいの人が来るようなイメージでいらっしゃいますか。

○議長 非常に関心の高いテーマであると思いますので、100人とかすぐ集まるのではないかと思います。

○事務局 そうですね。会場は世田谷区民会館の集会室や教育センターの「ぎんが」など、100人は入れるようなところで。

○議長 来た人同士が議論して、明確に課題設定をしてあげれば、いろんなアイデアが出ると思います。100人でこの課題について考えた結果、いろんなアイデアが出た、いろんな立場の人が集まったというのは大きな成果だと思いますので、アプローチは賛成です。

○委員 区民にいろんな意見をもらうことはいいことだと思うのですが、プラットフォームをつくるとかまでいくためには、かなりの企画が必要だと思います。どういう方を対象にして呼ぶのかによっても違うだろうし、一般区民を対象としてやるのか、あるいは団体に所属している方を呼ぶのかによってかなり結果が違ってくる。その辺のターゲットを精査しないと、こぎ着けないという心配があります。

○議長 この限られた1回の中で、シンポジウム、ワークショップ、基調講演の中で、どうしたら最大の成果を出せるか。

○委員 確かに課題共有、区民全体に向けてというのも必要だとは思いますが、誰でもどうぞということになりますと、難しくなると思います。子ども食堂や学習支援をしている団体に、基調講演の後に実践事例や何かの発表をしていただき、将来的には世田谷区としてどんなことができるかというような、初めから何もないところからは難しいので、今現在あるところの方にお声かけするのはいかがかと考えます。

○副議長 無作為抽出で案内状を出す。接触がなかった人に広く案内をして、集まったほうがフラットないい議論ができるし、そのときに、いい課題を設定するといろんなアイデアが出る。プラス、あの人には絶対来てほしいという人も仕込めるといいと思います。

○議長 なるほど、確かに二段構えとなると、語りやすいようなその場の環境性をつくらなければいけないですね。

○委員 世田谷区の子どもの実態調査結果後、シンポジウムがあると具体的でいい。

○議長 区の子ども生活実態調査はいつまとまる御予定ですか。

○事務局 年度内には出るかとは思いますが。

○委員 現代的貧困をめぐる2つの見方の中で、個人的な貧困観と社会構造的貧困観とありますよね。私の時代は(1)の個人主義的貧困観で育った。自己責任、自己努力、それで頑張って勉強しろという時代だった。

今はかなり時代も違いますし、(2)の社会構造的貧困観に向けて、この議論が進んでいるかなという感じはしている。これから議論する中で、(1)の個人主義的貧困観をいかに克服していくかという課題なのかなという気がしている。

とすると、これからのシンポジウムにしろ、ワークショップにしろ、人選によってはま

だ(1)にこだわっている人がいると思います。そうすると、どのゴールでいくのかということとははっきりつかんでおかないと、方向がそれていく心配がある。

○委員 参考集に、『云々を阻害する要因については、政治や行政がこれらを除去していくことは可能』なんだと。まさにこの言葉が(1)の個人主義的貧困観の根にあるものをいかに除去していくかということが1つの大きな課題。

○議長 大事な御指摘だと思います。俯瞰的に物を見ていくことを日ごろしていないと、貧困は社会的構造だというのはなかなか理解できない部分はあると思います。

○委員 社会構造的貧困観の中の主な要因の4つはもうどうしようもないものです。地縁ネットワーク、これだけが具体的にできるものかなということですよ。

○委員 地縁ネットワークが衰弱しているということの中に、ネットワークに入ると大変な思いをすることがあって、実際にかかわってみると、地域の人が地域のことを自分たちで解決するのは、必ずしもその思いだけでは達せないことがあったときに、離れられないリスクがあるので、個人レベルでやるというのは違うのではないかな。新しい形の、安心してできる提案とかがあるといいなと思っています。

そのために、ネットワーク、グループとか、個人ではないものをつくる中で、やはりどんな人がそこにかかわっているか。そういう人を核にして、行政とかがかかわってくる。

○議長 社会教育の歴史をひもとくと、社会教育は、いかに封建的で理不尽なある種の因習が残った地域コミュニティを学習によって変えていくという、そういう運動でもあった部分が大きくて、それと同時にどういう社会をつくってきたかという、それぞれがプライベート重視になって、余りにもつながりがなくなって、共助の部分が失われていく。だから、今の時代に新たな形でどうやってつくっていくか。インフォーマルな共というのは、まだ私たちも経験していないものを構想しなければいけないのかもしれないかもしれません。

○委員 でも、根は少しずつできてきています。子ども食堂をやっている方の話ですけれども、本当に必要な子どもは来てくれないという悩みがあると。でも、地域の人たちが集まってくればいいということで、これは子ども食堂だけじゃなくて、そういう根が張ってきているなという印象は受けましたね。

○委員 子ども食堂に来た子どもたちに、夜会った時声がかけられて、ちょっとした抑止力になったりするのかもしれない。そういうところでの会話から何を拾うかということが、地域が目だと思います。ちょっと声がかけられる関係性、そんなことから始まっていったら。そして、それを見つけた先にかかわれる場所が用意されることもあわせて必要。

○議長 事務局から出された提案は賛成ということで、御依存はないでしょうか。そうすると、どんな中身でいくか、どういう方を対象に声をかけていくか、詰めの作業は次回、4回目ということでもよろしいでしょうか。

○委員 子どもの未来アクションの学習会というのが10月5日ありまして、相対的貧困、貧困が子どもたちに与える影響とかここで話し合われているような話を伺ってきた。

アンバサダーになった方が職場の皆さんに伝えますという活動として、15分プレゼン型、30分レクチャー型、2時間フォーラム型、3時間ワークショップ型というのがあるという紹介があった。このレジュメを見ますと、合う部分もあるなと思ひましてよかったです、どうぞごらんになってください。

○議長 ぜひこうした情報があれば、事務局のほうにお寄せいただいて、そういうのがヒントになっていくと思いますので。こちらの「広がれ、こども食堂の輪！ 活動ガイドブック 地域とのつながりづくり編」これは全国の子ども食堂を取材したもので、こども食堂を1つのハブにしながら、地域のネットワークが生まれてきているというのを取り上げているガイドブックだったものですから、まさにそれぞれの地域の実情に応じたインフォーマルな「共の世界」が生まれているのが見えて、お配りしました。

このガイドブックをまとめたのは上用賀にある「広がれ、こども食堂の輪！」全国ツアー実行委員会です。

民間でも、インフォーマルな共というのは、ボランタリーに湧いて出てくるというか。施策を考えるというのと、とにかく上からぽんとおろしてしまうような発想になりがちですが、私たちがそれぞれの立場から自発的につながり合って、どう豊かになっていくかという視点でいけたらいいとは思っております。そうでないと、多分長続きはしないですし、現場は生き生きしないと思います。

○委員 そうなってくると、しつらえもちろん大事だけれども、人ですよね。

○議長 第三の大人を発掘しつつ、つながりやすいような環境をどうつくるか。世田谷区は全国的にも市民活動が盛んだというふうには評価が高いわけですがけれども、でも、まだ個々になって動いているところもあったりする。そこがつながっていく必要があるわけですし、どういう環境になったらいいのか、ぜひここから議論を深めていけたらいいと思います。

次第3の今期テーマの方向性をめぐる意見交換に入ってきています。ここまでいろいろと意見は出ていますけれども、今後に向けて、アイデア等も含めて何かございましたら。

○委員 意見交換会をしたときには、関係性の貧困があって生きづらい人が、集まりに来るかは疑問です。それよりはむしろ、地域のために何かをしようという人たちをまず招き入れて、今の活動に理解を深めてもらいつつ、その方たちが今度、それぞれの地域に渡って、またそこで小さな集まりの輪を広げていく中で、広く浅く地域に落としていく活動のほうがやりやすいのかなという気がします。

あと、今の子どもたちが生きづらさを抱えたまま成長していくと、その子どもにかかわる比較的年齢層の近い大人、より世代が近い人たちが中心になったほうがいい。

○委員 いろんな施策って、よく知っている人たちの話し合いで、本当は届かなくちゃいけないところの意見が上がってこないのかなというところを鑑みると、やっぱり無作為というのもおもしろいなとちょっと感じました。

年齢の近い第三者の大人というところでいくと、昔は格好いいお兄さん、お姉さんが近くにいて、そういうふうになりたいというのもあったと思います。そういう人を捜し当てるのは難しいかもしれないが、ひっかかってくればいいなと思います。

○議長 ジュニアリーダーは世田谷区も存在している。そちらにアプローチするのも1つかもしれないですね。

○委員 大学生はどうでしょうか。学童クラブのパートに大学生が来ています。子どもとのかかわり方もいいですし、子どもの心を捉えるのも上手だし、自分たちと年が近いということもあり、意見を言ってもらうにはとてもいい方たちなのかなと思います。

○議長 社会教育を学ぶ学生たちは、子どもとの接点を持っていないことが多いです。地域で子ども会の活動なりジュニアリーダーで、子どもたちとかかわってきたという経験を持った学生は非常に少ない。

○委員 今、子どもとかかわってはいないけれども、考え方においては、偏っていない発想、私たちとは見る視点が違う部分がありますので、そういう意見もいいと思います。

○委員 学生さんはかかわるとしたら、年齢層が高い方とかかわっている方が多いということですか。

○議長 大学での資格講座を通じながら、やっと社会の動きや、学びの場を知って、体験して、だんだん開かれていく感じです。

○副議長 私のところは、コミュニティーが専門で、文献だけ読んでいてもわからないので、とにかく現場に出すようにしています。子どもの教育が専門ではないですけども、近所の大学生と子どものかかわりは結構顔見知りがある。

あと、湯河原町でも居場所づくりをしている。湯河原は中学までしかない。町を歩いていても大学生とか全くいない。家にはいるのかもしれませんが、見かけないですね。ですから、湯河原に大学生がいること自体が奇跡だと、町の人も喜んでます。小学生からすると、大学生がいることは楽しい。そうすると、仲よくなって、誰かが卒業すると行かなければというような関係性ができる。そういう日常的なかかわりがあって、相互の成長につながっているなという感じがある。

この間おもしろかったのは、大学を卒業する4年生の卒論発表をその居場所でやったときに、内容には興味ないけれども、卒業するお兄さんのことは好きだから聞いていた。そうしたら、俺大学に行くとか言っていましたよ。そういうことは結構日常的に起こっているんで、そんな体験とかを聞くのもいいのかなと思いますね。

世田谷は人が多過ぎて、湯河原みたいに2万人しかいない町だとすぐ仲よくなれるんですけども、世田谷ってそういう難しさはありますね。

○議長 仕掛けていかないと、そういうチャンスってなかなかつかれない。世田谷には大学が幾つかありますから、アプローチするのは1つだと思いますね。

○委員 社会福祉を学んでいる学生さんは、御自身が苦しい体験をされている方が多くて、そういう御自身の体験やいろいろなことが聞けるのではないかなと思います。

○議長 11月18日に、若者支援担当課が企画担当で若者支援シンポジウムをやります。これもインフォーマルな「共の世界」をつくっていこうということで、ここで企画を担当している「若者と咲かせるネットワーク・せたがや」には多くの若者たちも参加していますので、このネットワークにもアプローチすると、世田谷でつながっている若者たちが集まりやすいかなと思います。

こちらも2部構成ですね。第1部は、団体がそれぞれパネルを出して、それぞれブースを出して活動紹介を展示するみたいです。その後、テーマごとにグループをつくって、それぞれが理想の未来を語り合うというので、第2部で若者施策調査報告を行政から報告して、基調講演で、その後は会場参加型のオープンシンポジウムという、最後はそういう形になるみたいです。

○委員 地域のお姉さん、お兄さんというのは非常にいい発想かなと思います。実際の経験はないかもしれないけれども、関心を持っている学生はいるのではないかと思いますので、両方で育っていってもらえるようなものであれば、頭の柔軟性が少なくなっている大人よりもいいかもしれない。

単発的な施策ならば簡単かもしれないけれども、それを持続できるものにしていかなければいけないということも含めて考えていかなければいけない。

○議長 関係性の貧困から脱却に向けた方向性、方策ということを考えると、短期的なものではないわけですね。中長期で我々はビジョンを出した。そうすると、施策もそういうことを見越したものにならないとですよ。

○委員 広く地域の住民の理解、参加を促す点が必要だなという点では、無作為という方法はすごく目からうろこでした。子どもの貧困の言葉すらも聞いたことがない人たちがたくさんいますよね。そういう人たちに訴える場も必要だろうし、それを同時にできるかどうかかわからない。でも、方向性が定まっていなくて、どこに行くかわからないという話もそのとおりなので、専門的にやっている人とか、その活動に熱心な人たちの参加も大事だと思う。子どもの貧困という言葉は初めて聞いても、やっぱり最初の古典的貧困のほうしかぱっと思い浮かばない人たちのほうが多い。正直に言って、どちらを今やるべきなのかなというところで自分の考えがまとまらないですね。

今活動している人たちのネットワークはもちろん大事だと思うし、そこからいいアイデアも出てくるだろうけれども、それが地域にどのぐらい理解してもらえるようにやるのか。

私から見ると狙っていることが高く、子どもを取り巻く大人、第三の大人になかなかなれない現実があるなというのを聞いています。でも、こういうアクションがあるということが大事で、まずはやることかなという気もしています。

○議長 大事なポイントを提示いただいたと思います。子どもの貧困について全く初めてという方たちにも集まっていただくと同時に、既に活動もしているしわかっていて、何が必要かということも言える方たちに来ていただいてやるのか、それともどちらかに力点を置くのか、これは考えないといけないですね。

○委員 タイトルに子どもの貧困をいれるのがいいかどうか。貧困というイメージがそれぞれ違ってきますし、捉え方も違うので、誤解を招くようなことも考えられますよね。

○委員 参考資料に貧と困とは意味が違ふとあります。貧はプアだけれども、困は生きづらさ、その区別はしていかなければいけないし、タイトルをどうするかというのは難しいところだと思います。もし貧困がいけないならば、生きづらさを抱えた子どもたちとかになるでしょうけれども、貧困という言葉は投げかけることも、1つの意見がプラスマイナス、両端まざって出てくる可能性はありますよね。

○委員 貧困ってなくすことができるのかなというのは正直な話、最初にあって、この会

でどこまで持っていけるのかなというところを改めて考えたときに、周りに広めて、そこからまずは始めていこうというところ、やることが意味も出てくるのかなというのを考えた次第です。

○議長 このテーマは物すごく深過ぎて、最初の２年間は悪戦苦闘で、これからもそうだと思う。これからどういうふうにアクションしていくのかということも含めて、まだまだこれから皆さんと知恵を絞りながら、そしてまた、今度のシンポジウムを通じて区民の方々も一緒になって知恵を絞ってもらう。１人でも２人でも、そういう方をまずはふやさないとうしようもないかもしれません。本当にこれは理解しづらいですね。

○委員 ゴールは子どもの近々の貧困をなくすことだけれども、それによって、結果的には大人が成長しているというのがもう１つある、そういうふうを感じ始めています。

○議長 社会教育というのは大きく２つの柱があって、１つは人々の生きがいにかかわる課題、趣味とか教養とか、実用的な資格、知識を学び、生活の潤いをつくっていく、そういう学びの支援をするのが１つ。もう１つは、個人だけではやっぱり解決できないというか、社会的に共有しなければいけない課題を拾って、共有して、学習課題にして、学び合っていく。それを通じながらお互いにつながり合っていく、その両方を柱にして、社会教育の仕事はある。

○委員 そういう意味では、シンポジウム、ワークショップ、１つの大きな手段としては非常に有効ですね。

○議長 これでシンポジウムの意義も確認できたと思います。

次回は第５回のアクションに向けて具体的にどういう対象、方法、内容でいくか御議論いただきます。事務局から宿題が届くかもしれませんが、御協力よろしくお願いします。

それでは、その他に行きたいと思います。情報提供等何かございますか。

ないようでしたら、次回の第４回目の日程について決めたいと思います。

（ 日程調整 ）

○議長 では、１２月５日水曜日、６時半ということで。

本日の委員会はこれにて終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。